

森茉莉とその少女性について

高田夏子¹

Mori Mari and her girlhood

Natsuko Takata¹

Abstract：作家森茉莉について、まずその気質を、てんかん気質、中心気質、内向的感覚タイプという観点から考察した。次に、森茉莉と父親鷗外との関係について述べ、父親元型と密着しすぎている「父の娘」という観点から見たとき、「父親の輝きを背後にもった少女」ということができ、生涯その父子のナルシズムに守られていたということが言えた。また彼女は、「少年愛もの」から本格的な小説を書き始めているが、この「少年愛もの」は現代の「腐女子文化」に通じるものがあることを論じた。そして、長編小説『甘い蜜の部屋』を創造し書ききることによって、父の庇護を必要としない「絶対少女」となり、それは父からの自立を意味していたということを明らかにした。

Keywords：中心気質、内向的感覚タイプ、父の娘、腐女子、絶対少女

1. はじめに

森茉莉というと、まず鷗外の長女という説明になるだろう。二度の離婚の後、50歳を過ぎてから、『父の帽子』で本格的な作家デビューをしているが、彼女の作品には父親がモデルだろうという人物が多く登場している。代表作は、先の『父の帽子』以外に、少年愛を書いている『恋人たちの森』・『枯葉の寢床』があり、それから森茉莉の代表作と言えば何といっても、鷗外との子ども時代を描いたとされる『甘い蜜の部屋』である。鷗外からは特にかわいがられたことが言われているが、その父との幼少期がどのようなものであったかは、この『甘い蜜の部屋』からうかがい知ることができる。確かに茉莉の作品には、父親の鷗外を思わせる人物は多く登場する。しかし、茉莉は『甘い蜜の部屋』完成後の対談で、もう父のことは言ってほしくないと言っている²⁷⁾ (p. 101)。作品の中の父親鷗外を思わせる男性は、茉莉のこのころの中の男性像なのだが、作品の中ではどんどん一人歩きをして、鷗外そのものではなくっていったようである。森茉莉の作品ではこのほか、『贅沢貧乏』をはじめとする、エッセイも人気がある。森茉莉の魅力の一つは、その独特の文章だが、三島由紀夫は森茉莉にあてた手紙の中で、「あなたの文学の世界では、言葉は実に気むずかしく選び取られ、実にハイカラに配列され、頁をあけるなり馥郁たる香りがただよび、人はその壺に落ち込んだが最後、『蜜』どころか甘い硫酸に溶かされてしまいます。それといふのも、その蜜が、その硫酸が、その言葉

が、完全に無垢だからであります」と、絶賛している¹⁰⁾。

この森茉莉について、「父の娘」、また、「男の視線にねめまわされた『少女』のような無垢を装った媚態もない」²⁵⁾ (p. 30)、「解放された少女」²⁷⁾ (p. 18)という視点から書いてみたいと思う。

2. 森茉莉について

まず森茉莉の生涯について触れたい。

1) 幼少期

1903年(明治36年)1月7日、東京市本郷区千駄木21番地に、父森林太郎(鷗外)と母志け(げ)の長女として生まれる。鷗外には先妻との間に長男於菟がいて、その養育は主に祖母が当たっていた。茉莉の生まれた翌年1904年(明治37年)には、日露戦争が開戦し、鷗外は第2軍軍医部長として小倉に赴任する。この時期小倉から妻志けへあてた手紙¹³⁾で、茉莉のこともたびたびふれ、こうしたほうがいい、ああしたほうがいいとかなり細かいことも書かれている。しかし小倉から帰り、茉莉と対面した時、最初茉莉はずいぶん鷗外に対して人見知りをしたらしい。茉莉をあやすため、鷗外はずいぶん苦勞をしている¹⁵⁾。

1908年(明治41年、5歳)、1歳になる弟不律とともに、百日咳にかかり、茉莉はあと24時間と宣告されたものの、奇跡的に死を免れた。このくだりは『甘い蜜の部屋』に詳しく描かれ、ほとんど事実のままであるという。しかし、苦しむ茉莉を見て、鷗外は安楽死を考え、舅の荒木博臣に止められたというエピソードは、さすがに『甘い蜜の部屋』には入っていない²⁷⁾。死を宣告され

受稿日2013年12月10日 受理日2013年12月13日

1 専修大学人間科学部心理学科 (Department of Psychology, Senshu University)

たのちにいくらか回復に向かい、「にゅうとねい（牛と葱）」が食べたいという茉莉に、父親が精養軒に注文を出して取り寄せるというくだりがある。この後茉莉は回復に向かった。弟の不律はその後に亡くなっている。なお、茉莉の書くものにはよく食べ物や料理が出てくる。茉莉自身料理に関してはなかなかの腕前だったらしい。料理についてのエッセイも多いが、その味は子どもの頃舌で覚えたものである。

2) 学校時代

1909年（明治42年）、6歳で、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）付属小学校第2部尋常科に入学。この年、妹杏奴が生まれる。翌年1910年（明治43年）、鷗外は茉莉のためにピアノを購入し、ピアノを習わせ始める。『甘い蜜の部屋』では、フランス人ピアノ教師から習う設定になっており、この教師は主人公モイラが虜にする男性として描かれている。1911年（明治44年）、弟、類生まれる。この類の著作『鷗外の子供たち』²³⁾に、鷗外が茉莉を抱いて、「これは茉莉のピアノだよ。これはお前のピアノだよ」と言って部屋中を回って歩き、ピアノを習い始めた茉莉は、洗い髪のようなきれいな髪を肩まで垂らし、銘仙の着物に紫の袴をはいて椅子に腰をかけ、ピアノを習っていたということが書かれてる。鷗外の溺愛ぶりや、当時のお金持ちの雰囲気がよく伝わってくるエピソードである。しかし、茉莉がピアノを習い始めた翌年に類は生まれているわけで、果たしてこのエピソードはいつの時のことなのだろうか。いずれにしても小さかった類にとっても印象に残ったということではあるのだろう。長男の於菟も『父親としての森鷗外』¹⁴⁾を書いており、次女の杏奴も『晩年の父』¹²⁾など、鷗外について書いている。それらを読むと、茉莉への溺愛だけでなく、子どもたちそれぞれが自分は父から愛されたと感じていることがわかり、鷗外は、そつなくどの子どもにも愛情を注ぎ、子どもの気持ちをつかむことができたようである。

1913年（大正2年）、10歳の時に、学校の裁縫教師になじめず、仏英和高等女学校（現・白百合学園）尋常小学校に転校する。フランス語を選択する。『甘い蜜の部屋』には、教員で、怖い嫉妬深いシスターが登場するが、この裁縫教師がモデルだろうか。翌年1914年（大正3年）、妹杏奴もこの仏英和の幼稚園に入学する。この年、母方祖父、荒木博臣が死去している。茉莉はこの祖父のことも、「稚い女だったころ、恋愛的気持ちを持って」人のひとりであると述べている²⁷⁾。

3) 結婚

1918年（大正7年、15歳）10月、貿易商の息子でフランス文学者の山田珠樹と婚約。茉莉は家事ができないので、お金のある家に早く嫁がせなくてはという鷗外の考えがあったようだ。珠樹も茉莉を気に入り、「我見いだせり」（ユウレイカ）と彫られた婚約指輪を贈る。翌年3月に、仏英和高等学校を卒業し、11月に珠樹と結婚。その翌年、1920年（大正9年、17歳）、11月、長男齋（じゃく）が生まれる。病院から鷗外に出した葉書には、「痛くなくてウンコみただった」と書いたという¹⁾。小学生の男の子が喜びそうなことばである。茉莉の子どものような天真爛漫さがよくわかる。齋という命名は、やはり鷗外によるものである。

4) バリへ

1921年（大正10年、19歳）、夫珠樹フランス文学研究のため渡欧。周囲は反対したが鷗外の押しもあって、茉莉も翌年、ドイツに医学留学する異母兄於菟とともに渡欧する。夫とパリのホテルに住み、交友を楽しんだという。しかし、ロンドンに滞在時、鷗外の死を知る。帰ろうとするが思いとどまり、夫の提案でその後ドイツのベルリンに行き、鷗外の思い出に触れる。

5) 帰国、珠樹との不和

1923年（大正12年、20歳）、8月、フランスより帰国。9月に、関東大震災に遭う。一時珠樹の実家にいて、のちに目白の借家に住む。この2年後、1925年（大正14年、23歳）、次男亨が生まれる。

珠樹は芸者遊びをするようになり、このころ夫婦間に亀裂が入りつつあった。しかし翌年には、駒込に家を新築し、リンゴの種を庭の隅に植えたり、次男亨の片言をノートに書きつけて喜んだり、二人の息子と子どものように遊ぶ日々であったという。3人の子どもという感じだったのかもしれないが、茉莉のような大人と遊ぶことは、子どもにとってはすごく楽しいことであっただろう。子どもたちが成人してから再会し、おそらくいろいろな感情はあったであろうが、決して子どもたちとの関係は悪くならなかったのは、茉莉の性格的な要素が大きいが、このような日々を過ごせたこともあるのだろう。

1927年（昭和2年、24歳）、珠樹と離婚。この離婚は性格の齟齬ということだが、珠樹の疑心とそのような珠樹に対する茉莉の反抗、つまり自己本位の精神を全うしようとする姿勢であったという²⁾（p. 58）。このあたりの珠樹との暗い関係は、「記憶の書物」（森茉莉1993）に

書かれている。「息子ジャックと私」¹⁹⁾ (p. 628) では、外出をほとんど禁じられていたということも書かれている。それで、子どもに手紙を残し、家を出たという。のちに、「一生が二つあるのなら、自分は二人の子供とすることのために、この家にいるだろう。だが一生は一つしかない。一つよりない一生を、子供の犠牲になるのはいやだ」と書いている²¹⁾ (p. 436)。強く正直である。母親というアイデンティティだけで生きられる人ではないが、自分の気持ちの半分は子どもに向けることもできるのかもしれない。茉莉はこの後実家に戻る。そして子どもたちとはずいぶん後に再会することになる。

6) 再婚、そして再び離婚、妹・弟の結婚

1930年（昭和5年、27歳）、東北帝国大学医学部教授佐藤彰と再婚。仙台市に住む。しかし、「仙台には銀座がない、三越がない」と言っていた。「お芝居をみてもらっしゃい」と言われて東京に里帰りした時に、いきなり離婚を迫られることになってしまう。2回目の結婚・離婚について、茉莉自身が書くことがなかったというが、茉莉の生き方にはほとんどかすりもしないぐらい合わないものであったのかもしれない。戦争中は森家に寄宿する生活だったが、いわゆる出戻りで、肩身の狭い思いをする。

この少し前、26歳頃より、雑誌などに、翻訳やエッセイを書いている。

1934年（昭和9年、31歳）、妹杏奴が、画家小堀四朗と結婚する。このあたりは、森類の『鷗外の子供たち』に詳しい。そして、1936年（昭和11年、33歳）、母志け死去し、茉莉は千駄木の家に、弟類と一緒に暮らす。しかし、1937年（昭和12年、34歳）に、鷗外の建てた観潮楼は借家人の過失で、母屋が焼けてしまった。茉莉と類はこの離れに住んでいた。この後、1941年（昭和16年、38歳）、弟類が、画家安宅安五郎の長女、美穂子と結婚する。そのため茉莉は下谷上吉町の勝栄荘に移る。娼婦の人なども住んでいるところだったというが、茉莉自身は気に入っていたという。しかし、戦争がひどくなり、1944年（昭和19年、41歳）、弟に説得されて、類の妻美穂子の実家のある喜多方町に疎開する。この間、1945年（昭和20年、42歳）、空襲で観潮楼が全焼してしまう。この火災で、記念のものなど、鷗外の大切なものも焼けてしまっている。

7) 子どもとの再会と母のダイヤモンド

1946年（昭和21年、43歳）、杏奴宅で、次男亨に再会

する。父が亡くなった時に、兄から、自分たちの実の母は森茉莉であるということを知っていた亨は、その後茉莉の妹の小堀杏奴の本を読んだり、彼女に手紙を書いたりしていた。再会した時のことを「部屋に入ると、僕に似た女性がいて、『亨』と言って、僕を抱きしめて、激しく泣いた。抱かれながら思った。母親というのは、子どもを抱き締めるんだなど。僕は、継母から一度も抱かれた記憶がなかったからだ。父に抱かれた記憶は何度もあるのに」と述べている²⁹⁾。その後、1947年（昭和22年、44歳）、杉並区永福町で間借りを始める。このころ母から譲られたダイヤモンドを生活費のために売る。1951年（昭和26年、48歳）には、長男壽が訪ねてきて、再会し、一時は恋人のように会う。この年に代田のアパート、倉運荘に移る。

8) 随筆・小説

1953年（昭和28年、50歳）、暮らしの手帖社に客員として籍を置いて、時に随筆を書く。

1954年（昭和29年、51歳）、『暮らしの手帖』、『日本読書新聞』に随筆を発表。

1957年（昭和32年、54歳）、随筆集『父の帽子』を筑摩書房より刊行。これで、第5回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞する。

1958年（昭和33年、55歳）、6月に室生犀星を訪問。10月、『靴の音』を筑摩書房より刊行。

1960年（昭和35年、57歳）、倉運荘の茉莉の部屋を室生犀星が訪問する。『新潮』に、「室生犀星という男」、「贅沢貧乏」を発表。

1961年（昭和36年、58歳）、9月、『恋人たちの森』を新潮社より刊行。これにより、第2回田村俊子賞を受賞。茉莉のエッセイを読んだ、当時の新潮の編集長が、茉莉の担当者に「小説を頼んでごらん」と言って、小説を書くようになった。この編集長は才能をパッと見る勘のある人で、ほとんど外れないという⁷⁾。

1962年（昭和37年、59歳）、3月、室生犀星死去。6月、三島由紀夫と初対面。7月、『枯葉の寢床』を新潮社から刊行。

1963年（昭和38年、60歳）、『ミス』1-12月号に、男性の服飾小物に関するエッセイを連載する。前年の室生犀星死去の時の茉莉の追悼文を基にした『禿鷹の死』が『ラジオ小劇場』で放送される。5月、『贅沢貧乏』を新潮社より刊行。その広告の写真をよく撮れていると大変気に入っている。

1964年（昭和39年、61歳）、『ミス』1-12月号に、

「私の人物スケッチ」として人物訪問を連載。『ラジオ小劇場』で書き下ろしドラマ『林の中で』を放送。この頃、のちの『甘い蜜の部屋』の主人公、モイラが天から降ったように降りてきて、茉莉の中に宿り始めたという。

1965年（昭和40年、62歳）、『ミス』1-12月号に「私の贅沢貧乏」として、「香水の話」、「夢を買う話」、「靴の話」などを連載する。『新潮』6、7月号に、「甘い蜜の部屋」の第一部を発表。

1967年（昭和42年、64歳）、2月、『新潮』に「甘い蜜の部屋」の第2部「甘い蜜の遊び」を発表。3月、『婦人公論』に「華麗なる往復書簡」として、三島由紀夫「あなたの楽園、あなたの銀の匙—森茉莉様」とともに、「あなたのイノサン、あなたの悪魔—三島由紀夫様」が併載される。

1968年（昭和43年、65歳）、『ミス』1-12月号に「私の美男子論」として、人物訪問記を連載。6月、『私の美の世界』を新潮社より刊行する。11月、「熊本日日新聞」の「日々の想い」に新稿を加えて『記憶の絵』を筑摩書房から刊行する。下北沢の風月堂が火災で焼失し、このころから邪宗門に通うようになる。

1970年（昭和45年、67歳）、11月25日、三島由紀夫自決。兄を失うような衝撃を受ける。

1971年（昭和46年、68歳）、『芸術新潮』の1-12月号に、「ひともする古都巡礼を」を連載。編集部は茉莉に京都に赴いて書いてもらうつもりだったが、結局一度も足を運ぶことなく連載を終えた。この年、三島由紀夫の追悼文を『三島由紀夫読本』、『新潮』、『群像』などに発表。

1972年（昭和47年、69歳）、4月、『新潮』に「再び甘い蜜の部屋へ」（「甘い蜜の部屋第3部」）を発表。4月16日、川端康成死去。

1974年（昭和49年、71歳）、7月、鷗外忌の集まりで、次男亨と再々会、以来定期的に訪れる。12月31日、『甘い蜜の部屋』を書き終える。

1975年（昭和50年、72歳）、8月『甘い蜜の部屋』を新潮社より刊行。これにより、泉鏡花賞を受賞する。

1976年（昭和51年、73歳）、1月、類夫人、美穂子の葬儀で、長男壽に会い、以来またときどき会うようになる。

1978年（昭和53年、75歳）、『枯葉の寝床』が、渋谷西武劇場で三輪明宏演出で上映。しかし茉莉は芝居には失望する。原作にはない演出で、少年が男に与えられた財布をたたき返すシーンがあるのを、「(原作の)少年は、

動作にも、言葉つきにも、きれいなところがあるが、性格には、贅沢な暮しや宝石に弱い、卑しいところがある。さふいふところを三輪明宏（原文ママ）は、小説の中から読み取っていない」と怒っている²¹⁾。村田¹¹⁾は、「金が介在するからといって男と少年の関係を汚いものとして描いたのではなく、むしろ、それゆえにこそ美しいものとして書いたのではないか」(p. 48)と述べている。

1979年（昭和54年、76歳）、3月、心不全による肺水腫のため、日赤に緊急入院。5月に退院。9月より、『週刊新潮』に、「ドッキリチャンネル」の連載を開始する。

1981年（昭和56年、78歳）、『ベスト・オブ・ドッキリチャンネル』²²⁾に「私が死んだら墓石に私の名などは彫らないで、本音居士の四字を彫ってもらいたい。それこそ私を成仏させる唯一の手段である」と書いている。

9) 晩年

1983年（昭和58年、80歳）、経堂フミハウスに転居。長男壽は毎月家賃を持参し、次男亨夫婦も毎週のように掃除に訪れていた。しかし、掃除は茉莉に断られているのであったが、意を決して掃除をさせてほしいという息子に、茉莉は、「よい息子の気持ちに逆らうのは、実に実に苦しい。でも、それを断るのは、私の命（身体の命でなく、こころの命）のためです。断ったため、亨がいやになって（真心からの心配を無視されて）、しだいしだいにわたしの家に来なくなっても（あるいは一度も来なくなっても）、小説のために止むをえません…」と述べている²⁹⁾。

1984年（昭和59年、81歳）、鷗外ドイツ到着100年を記念し、ベルリンに森鷗外記念館がオープンする。式典には、妹・小堀杏奴、甥・森真章が出席したが、身内の者なら誰でも参加できたことを後に知り、「パッパのマリアも行きなかった」と残念がる。

1985年（昭和60年、82歳）、2月14日、心臓発作を起こし、至誠会第二病院に緊急入院（4月29日退院）。2月18日に『週刊新潮』連載の「ドッキリチャンネル」が281回をもって終了した。退院後にそのことを知った茉莉は、連載を続けたいと編集部にかけあったようだが、身体のことを考えると連載継続は難しく、その願いはかなわなかった。

1987年（昭和62年、84歳）、6月6日、世田谷経堂のフミハウス自室で心不全のため死去（発見は6月8日。死亡推定時刻は6日の午後4時頃）。三鷹禅林寺の森家

墓域，森林太郎，志けの墓に並んで，於菟らの眠る森家墓に埋葬される。戒名常楽院茉莉清香大姉。

3. 森茉莉の気質

1) てんかん性の性格特徴

石毛²⁾は，森茉莉の気質について，森茉莉の作品や生活歴をてんかん性の性格特性とその関連から考察している。自伝的長編小説『甘い蜜の部屋』に記載されているモイラの若年性てんかんと推測される下りを手掛かりに，母方の家系に伝わる気質，作品に認められるドストエフスキーに共通する雰囲気や独特の論理をもつ文体，ロールシャッハテストの所見，細部への拘泥，創作態度の粘着性，内容の反復，表現形式の保続といった覚醒てんかん者の人格特性を見いだした。それらの考察から，森茉莉は安永の提唱するてんかん性を拡大した概念である中心気質であったと考えられた。読者にとっては，因習からの解放と想像欲求の刺激として受け取られているという側面を指摘した。

石毛²⁾によると，『甘い蜜の部屋』に記載されているモイラの，「不機嫌」，「我を忘れて」，「ヒステリーのやう」，「眼が陶酔となった」が，意識障害を疑え，若年性欠神てんかんと推測されるという。また母の志けには，怒りが爆発するととめることが難しい「爆発性」，「易怒性」と考えられるところがあり，そして祖母あきにもてんかんの症状があったようである。こうした母方の家系に伝わるてんかん気質があったことが考えられる。体格的にも，「厚みのある立派な体格」⁵⁾と述べられており，てんかん気質の闘士型の体格と言えらるだろう。

石毛²⁾はまた，茉莉のてんかん気質を文の特徴にもみている。「全体よりも部分へ重きが置かれ，(中略)バランスが崩れることをいとわずに細部に向かう傾向がある(p. 62)」と述べている。また「～なので，ある」というような，変わった句読点の打ち方も森茉莉の文章の特徴だが，このような細部への過度のこだわりがてんかん気質から来るものであろうと言うのである。このほか，内容の繰り返し，創作態度の粘着性などもてんかん気質に一致すると述べている。

森茉莉の文章は，一般的には悪文なのであるが，森茉莉ファンにとっては，なんとも魅力的なようである。単にてんかん気質の細部のこだわりや粘着性では説明できない，美しく，ひきつけるものがある。三島由紀夫¹⁰⁾も，「森茉莉商店でしか売ってない言葉を使いながら，(中略)丹念に，というよりはわざと糸の玉のようにこんがらかせながら，結局見事に明晰に描いていきま

す」と絶賛している。

2) ロールシャッハテストに見る特徴

石毛²⁾も取り上げているが，『作家の診断』³⁾の中に，森茉莉のロールシャッハテストがある(表1，2)。片口³⁾は，森茉莉の反応の特徴として，図版の一つのイメージにとらわれると，そこから抜け出すのが難しく(固執現象)，そのイメージに埋没してしまいやすいこと，「悪魔の～」という表現が多く，まるで子どもの恐怖そのもののような，図版の持つ幻想的な動きには敏感だが，客観的な属性にはあまり気づかず，徹底した内向性を示している，ということあげている。そして，「その子どもらしさは一つのポーズではないかと考えたくなるほどである。しかし，もっと素直に，氏の中には《幼児心性》が，多分に残存しているとみておくべきであろう」と述べている。子どもらしさをそのまま残せているところが，森茉莉の特徴であり，魅力であり，才能なのだろう。

3) 中心気質

安永²⁸⁾のいう中心気質は，「『ふつうにのびのびと発達した』5～8歳位の『子供』のイメージを浮かべていただくのがよい。天真らんまん，うれしいこと，悲しいことが単純にはっきりしている(しかも直截な表現)。周囲の具体的事物に対する激しい好奇心。熱中もすればすぐ飽きる。動きのために動きを楽しみ(ふざけ)，くたびれれば幸福に眠る。『野の百合，空の鳥』ではないが明日のことは思い煩わない。『昨日のこと』も眼中にはない…」というもので，5～8歳の子どもの，「無・合理的にほほえましい」状態という。これは「どんな人の心にも，その基底にはこの性質がひそみかくれている」もので，これが「あまり大きな変更を受けず，いわば中心円の周囲に等心的に拡大分化したとすると，『中心気質の成人』ができあがる。この成人は，従って今述べたような『子ども』らしい部分を，かなりはっきりと保存している」という。これまでみてきた森茉莉の生活様式，存在様式を考えると，天真らんまん，子どもらしさをきれいに保存していることなどは，この中心気質に実によく当てはまっているように思う。安永はまた，一方で中心気質は，「その成長がいびつである場合，あるいは挫折の結果を被る場合，等々において，かなり特徴ある『中心気質周辺』的な人格をつくり得る。その1部はかなり病的，ともみなせる形があり，(中略)『類てんかん気質』は，そのような病的突角の一つ，極北的な亜

表1 森茉莉のロールシャッハテスト, 反応分類表

〔反応分類表〕

カードNo. と反応数	反応時間と カード位置	反応領域	反応決定因	反応内容	P-O	その他のカテゴリー
I 1 2	48" 2' 00"	W W, S	F ± F -	(A) Atb	P	
II 1	5" 1' 30"	W	M ±	(H)	P	
III 1	40" 1' 45"		M ±, CF, m	H	P	
IV 1	20" 1' 25"	W	FM -	(A)		作話傾向反応
V 1 2	17" 40"	W W	M ± F ±	(H) A	P	
VI 1	27" 1' 05"	W	Fc ±	Aobj	P	
VII 1	7" 1' 00"	W	M ±	(H)	P	
VIII 1 2 3	18" 1' 05"	D ₂ D ₆ D ₁ → W	CF, cF FC ± FM ±	Pl (H) (A)	(P)	
IX 1	25" 1' 00"	W	KF, M, m	Cl, (H)		
X 1 2 3 4 5 6	45" 1' 50"	D ₄ D ₁ D ₁₁ D ₃ D ₆ D ₈	F ± F ± F ± FM ±, FC F ± F ±	A A A A A Pl		作話傾向反応 ズタズタ反応

出典：片口安史1967『新版作家の診断』新曜社

表2 森茉莉のロールシャッハテスト, まとめの数表

〔まとめの数表〕

反 応 数	{ R 19 Rej 0	運 動 反 応	{ M 4 ₊₁ FM 3 m 0 ₊₂
初発反応時間	R ₁ · T 25"	色 彩 反 応	Σ C 2.3
反 応 領 域	{ W% 53 D% 47 Dd% 0 S% 0	陰 影 反 応	{ Σ c 1.5 Σ K 1
反 応 内 容	{ H% 26 A% 47 At% 5 P 6 ₊₁	形 態	{ F% 42/89 F+ % 63/65
		反 応 の パラエティ	CR 6

出典：片口安史『新版作家の診断』新曜社

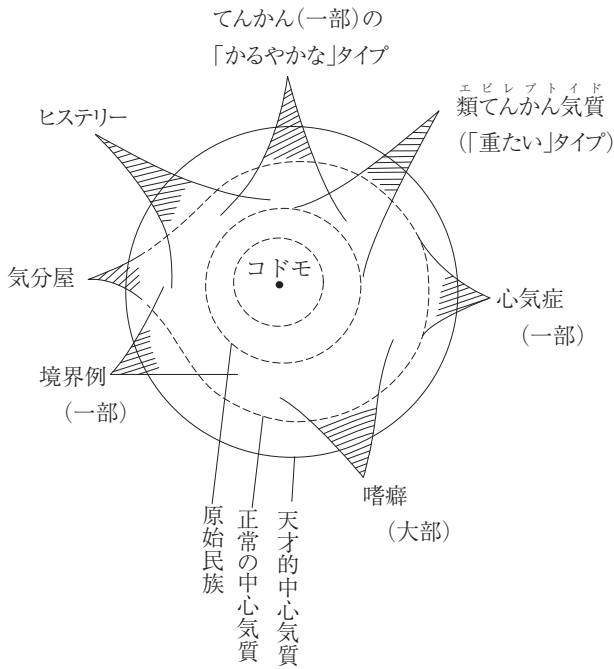


図1 類てんかん気質の図
 出典：安永浩「〈中心気質〉という概念について」『てんかんの人間学』木村敏編，東京大学出版会

型である」とも述べ、それらを図で表している（図1）。森茉莉がこの図のどのあたりに位置するかを考えると、類てんかん気質の特徴でもある粘着の傾向を少し持っている、天才的中心気質というものであろうか。

4) 書くことで思考する

森茉莉は手紙魔であったようだが、担当編集者だった小島千加子は、その手紙を『ほやきと怒りのマリア』という本にまとめている。その小島がインタビューに答える形で、茉莉の創作の仕方について述べている⁷⁾。それによると、ごちゃごちゃの頭の中から、書くことでそれを整理し、思考していたようである。小島はそれを「手紙だと明晰だった人」と述べている。以下インタビュー記事を取り上げてみる。

- ・「あの人の中に、あまりにいろんな面が混沌とまざっている。それから時間の整理がうまくついていない場合がある。それは鷗外の時代の事なのかと思っても、いちいち『え、何それ』なんて聞かないで、適当に判断をしながら聞いているわけ。そのうちどうも今の事らしい、とかね」
- ・「手紙だと明晰なわけ、いうことが。」

また、話しかたについても言及がある。独特の抑揚、

独特の対話の感じがあったようである。

- ・「わりあい一本調子に一人よがりにはしゃべる。だから人と面と向かっての対話っていう感じになかなかいかなかったのね。一人でしゃべるんだけど、その抑揚が、私たちの抑揚とちょっと違う。それで掴みにくいっていうことがあったんですよ。」

頭の中のごちゃごちゃの感じ、また対人接触の一本調子の独特な抑揚、というあたりは、最近はやりの軽度発達障害か？と思わせるところがある。また片づけられない、その気もないという面も、森茉莉では有名な話で、その部屋の様子は、『贅沢貧乏』¹⁷⁾に詳しい。本は雪崩を起こし、足の踏み場はおろか、寝るスペースも全身分は確保できないこともあったようである。会って話すと、「不思議ちゃん」と言いたくなるのではないだろうか。文芸別冊の総特集『森茉莉』（2013）には、「天使の贅沢貧乏」というとびっきりの副題がついているのだが、書いている人たちが森茉莉に魅せられていることがよく伝わってくる。独特さで周りを引きつけ、天使と呼びたくなる魅力をもっていたことがうかがえる。手紙になると明晰になるというのは、そのままではごちゃごちゃ整理のつかないものを、書いていくことで整理し、多少論理的に考えることができるようになるということではないだろうか。

5) 内向的感覚タイプ

小島⁷⁾はまた、茉莉の創作の仕方についてもインタビューのなかで触れており、それを「写真からイメージを湧かせる」と表現している。

- ・「映画のスチール写真みたいな場面が、頭の中にハッキリ定着しないと書けないっていうところがあるんです。（中略）『今日素晴らしいものを見つけた、何とかなの写真。この中の何とかなの表情を見ていたら、これが小説の何とかなの表情に使えと思った』とかね、こういう凝り方。観念だけ、文章だけで、頭の中で作っちゃうんじゃなくて、その場面場面が具体的に、映画の一つ一つのコマみたいに、頭の中で連続して出てこないと茉莉さんは書けないんですよ。それには出てくる人物の顔ぶれごとに、ハッキリ表情が見えてこないダメ。建物まで、うしろの風景、樹木、そういうものも頭の中であって、それが映画の中のシーンとして出てこないダメなの。」

茉莉さんの作り方はまったく映画。映画の一コマコマを並べていくみたいに。」

このコメントから筆者は、シャガールが、創造で描くのではない、見たものを描くのだと言っていたというのを思い出す。シャガールは、ユングの類型で言えば、内向的感覚タイプで、画家には多いタイプであるという。五感を通して入ってきたものから起きる自分の中の感覚を絵にできるということである。それはあたかも見たもののように思い描くことができ、だから、見たものを描くとなるのである。茉莉の場合も、写真からイメージを湧かせ、映画のコマのように小説を描くというのは、内向的感覚タイプと言えるのではないだろうか。料理についても、子どもの頃の味を舌で覚えていてということだが、五感を通した感覚には強かったのだろう。それが小説の書き（描き）方にも表れているようである。

4. 「父の娘」

森茉莉を「父の娘」ということは多くの人が認めるところだろう。「父の娘」とは、心の深層で、「父なるもの」つまり、父元型との関係が密着しすぎている女性のこと、「父なるもの」のイメージに振り回されたり、父の娘としての自分しか持たないとなることもある。父親は、女の子が最初に会う異性であり、「娘とも母親とも全く違う存在なので、娘のこころの中に異質性・独自性・個性を形作るといえよう。さらに娘が男性とかかわっていくのに、大きな影響を与えることはいうまでもない」⁸⁾ (p. 108)。知的で、男性的、科学的、合理的なものをよしとする現代で、父親元型にとらわれて生きにくくなっている女性は多いだろう。本人も気づいていないけれども父の娘である人も結構いるのではないだろうか。

1) 永遠の少女

ずっと父の娘である、ということは、ずっと少女であるということでもある。これを「永遠の少女（プエラ・エテルヌス）」という。永遠の少女は、受身的であったり、その反対の無謀なほど自由であったりする。ユング派の女流分析家である Leonard⁹⁾ は、これを「父・娘関係」の傷としてとらえ、その娘の役割に四つの型を見いだした (p. 64-94)。

①可愛い人形：誰かの「可愛い人形」になる。恋人の期待通りのイメージになり、恋人が女性に対して抱えている幻想を取り入れていく。外見上は安定を得

て、成功を収めた女性に見えかねないので、多くの女性の羨望的となる。しかし内面的なアイデンティティはもろく不安定である。絶えず他人のためにポーズを取っているのが、自分が本当は何者であるのかが、彼女にはわからないからだ。その典型例はイプセンの『人形の家』のノラである。

②ガラスの少女：引っ込み思案でか弱く、人生から逃避して、空想の世界で生きる。「幻の恋人」や神秘的な夢をもって、社会に出たり男性とかかわったりすることができず、みずからの「空想」というガラスの中に囲い込まれている。空想の世界を作ること、外界から切り離されたことを埋め合わせているのだろう。こうした人生を生きる女性は少なくないが、それを隠しているのが、知られることはあまりない。しかし現実と直面することで空想の世界が壊れると、カウンセリングに助けを求める。典型は、テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』のローラである。

③とんでる女—女ドン・ファン：衝動に生き、風のように自由ではつらつとしている。その時の気まぐれで、出来事に身を任せる飛んでいる女は可能性の世界に暮らしている。しかしこのような生き方はまたはかないものでもあって、一瞬何らかの形を取ったかと思うと、やがて消え失せてしまう雲さながら、魔法のように現れたり消えたりするものである。時間性がなく、「空間的」な彼女は、限界との関係が常に障害の種で、制限や実際の秩序、形而下の領域や時間との関係がうまくいかない。彼女の生き方には対外方向性がなく、偶然的な出来事に身をゆだねている。こうした女性は、直観的で、芸術的、神秘的関心があり、想像の世界で楽しく暮らし、無意識や元型の領域とも近い。典型は、アナイス・ニン『愛の家のスパイ』のサピナである。

④はぐれ者の女：父親を恥に思うあまり、社会から拒絶されたり、社会に反抗したりする生き方である。この女性は父親と一体化しており、無意識では肯定的に父親に愛着をもっているのが、社会が父親を拒絶すれば彼女は社会を拒絶するという具合になる。こうした家庭環境では、母親が正義の味方の立場に立って、「悪い父」を非難している。父親に似た行動様式を娘がすれば、こっぴどく非難して、父親と同じ運命をたどると脅すのである。母親の「良き忠告」に従わない場合には、娘は反抗して父親の生き方を踏襲し、自己破壊的な行動に走ることになりか

ねない。典型は、アーサー・ミラー『転落の後に』のマギーである。

これらの型は、タイプというより、実際にはひとりの女性が、その時、その場で、これらの生き方をいくつも実現しているようなものであるという。回復には、少女のような依存性や純真さや無力感にすがりつくことをやめて、すでに存在している強さを受容し、真の意味で自分を評価することである。自らの力や強さが受け入れられるようになれば、彼女の少女らしい純真さは、若々しく女性的な弾みや生气となって現れ、新しい経験に対してのびのびと開放的に接することで、想像的で実り豊かなかわりが可能となる、と Leonard⁹⁾ は述べている。

森茉莉の場合はどうだろうか。可愛い人形だろうか。確かに山田珠樹と結婚し、その実家にいる頃までは、そう見ることもできるだろう。しかし彼女は、「一生が二つあるのなら〜」という考えをもって、家を出ている。『人形の家』のノラも、自分に気がついた後は家を出ているのであるが、婚家を出た茉莉には、厳しい現実があったはずである。「ガラスの少女」の面はどうだろうか。ずっと父の世界で生きたとも考えられるので、その点ではガラスの動物園とも言えるかもしれない。しかしそれにしても生き方に豪快さがあり、厳しい現実にも対処してきている。では飛んでる女かということ、確かに自由ではつらつとしているが、男性を渡り歩いてということはないだろう。相手によって自分を変えるということはなく、むしろ頑固に自分のスタイルでいる。近所に買い物に行くときも、編集者に会うときも、カーディガンにスカート、買い物かごというスタイルだったという(小島千加子, 2003)。それでは、はぐれ者の女だろうか。珠樹の家を出たとき、「社会に出られないようにしてやる」と、変な風評を流され、そのためにずいぶんつらい思いもしたようである(森茉莉, 1993「私の離婚とその後の日々—今日出海氏へ」森茉莉全集 I p. 348-360)。しかし茉莉が社会を拒絶したわけではなく、たまたま生き方が普通とは違ってしまい社会と合わなかった、それが珠樹の悪意でウソのうわさを流され、誤解されたまま伝わってしまったということのようだ。その後戦争の時代となり、そうしたうわさもなくなっていった。

Leonard⁹⁾ のいうどの少女も、少しずつは森茉莉の中にありそうだが、どれも本質ではないようだ。心の傷ということではなく、もう少し健康なモデルが必要なのだろう。

2) 父親の輝きを背後にもった少女

「父の娘」の典型的なモデルは、ギリシア神話のアテネであるという。そもそも父親のゼウスの頭から、完全に武装して生まれてきたという。アテネは戦争とさまざまな技芸の守護神であり、また処女神でもあり、彼女に恋をしたヘーパイトスをはねつけた。しかし、このアテネの元型のこの側面にすべてとらえられてしまうのも、女性としては不幸なことだろうと思う。

このアテネと同じように「永遠の光を失うことのない輝かしい『父の娘』と似ている少女」が児童文学の中に見いだされる⁵⁾。『長靴下のピッピ』というリンドグレーンの作品の主人公である。腕力と財力に恵まれた9歳の女の子である。大人の既成概念からは自由な子どもで、粹にはめようとする大人に、ちゃんと理屈で応戦することもできる。大人たちには不愉快でも、その本質を見抜ける子どもたちからは歓迎され、愛されている。ピッピにはお母さんもお父さんもいない。ピッピのお母さんはピッピが赤ちゃんの時に亡くなってしまっている。しかしピッピは、お母さんが天にいて、小さい天の穴から自分を見下ろしていると信じていた。お父さんは船長で、ピッピと一緒に航海しているときに嵐に遭い、海の中に吹き飛ばされてしまった。しかしピッピは、お父さんは黒人のいる島に流れ着き、そこで黒人の王様になっており、いつかはきっと帰ってくると信じている(のちの物語でこのお父さんは本当に黒人の王様で登場する。彼は永遠の少年の肯定的な側面を体現するような人物である)。「ピッピは、『私のお母さんは天使で、お父さんは黒人の王様よ。こんなすてきな親をもった子なんて、そんなにいやしないわ!』と満足していた。ピッピは大人による支配と干渉を受けず、しかも、両親の信頼と見守りのなかに生きていた」⁵⁾。彼女の思いつく遊びに子どもたちは引きつけられ、なかなか痛快な物語が続いていく。

森茉莉の中にすんでいる少女は、このピッピのような少女ではないだろうか。二人の子どもとリンゴの種を植えて、庭で遊ぶ茉莉に、ピッピの姿が重なって見える。ピッピは両親の見守りの中で生きていたのであるが、それは彼女の強さのもとなのだろう。茉莉の、父に守られた子ども時代がどんなであったかは、『甘い蜜の部屋』に詳しいが、永遠の男性に、生涯守られていたといえるだろう。しかし、現実にはなかなか厳しいところも生きてきたはずである。二度の離婚や鷗外の印税が切れた後の経済的な苦勞などである。その中で、どうして少女性を失わず、生きてこられたのだろうか。ピッピは大人のこ

ころの中で永遠に生きていく子どもだが、現実の人間は年を取るのに。

森島¹⁵⁾は、森茉莉のことを父の愛以外を必要としない成長しない作家といい、少年愛ものを経て、『甘い蜜の部屋』にいたり、「父の掌から敢然と飛び出し」、「絶対少女」になったと述べている。これについてはまたのちに触れたいと思う。

5. 少年愛小説

森茉莉には、少年愛を描いた『恋人たちの森』・『日曜に僕はいかない』（1961）・『枯葉の寝床』（1962）があり、この少年愛ものが、独特の文体や独特のスタイルだけでない魅力を加えている。当時の新潮の編集長の「小説を頼んでごらん」から始まった創作だが、茉莉の最初の小説が少年愛というのが面白い。森茉莉の作品については、父一娘の関係からの研究と、このソドミズムについての研究がある。そして、少年と年上の男性との恋愛を描いた一連の作品は、年上の男性はやはり鷗外で、少年は茉莉を描いているのだろう、父を男性として描く方法であったのだろうと言われているようだ¹¹⁾。

はじめこれらの小説を読んだ時には、なぜ女性の作者が男性同性愛を描くのだろう、それも書くにつれて残酷さが強調されているように読めるのがよく理解できなかった。いくつか研究書を読んでいくことで、父との関係を繰り返し書くことを小説に仕立てるとそうなったのだということ、少年と年上の男性の関係は、鷗外と茉莉のように安定した永久に続くようなものではなく、刹那的でいつ終わるともしれない関係であり、そのために激しくサドマゾ的になっていく、また「父は自分だけを愛している」という幼児の世界が崩れてくると、それは罪の意識となり、それが反転して罰となるので残酷さとして描かれる、ということはわかるようになってきた。そのうえでもう一度、小説を読んでいくと、どうもこの世界は知っているような、筆者自身にもなじみのあるような気がしてきた。昔から好きだった少女マンガの世界に通じているのだった。

1) 腐女子文化

中島梓²⁴⁾は、彼女も思春期に森茉莉の少年愛小説に出会い、衝撃を受けている人だが、「なぜ森茉莉がそういう少女たちの先駆者として、現実の世界に背を向けてあんなにも美しい、あんなにも退廃的な世界を最初にみることができたのか」、「森茉莉が作り出したものは一つの『文化』とそれを作る感性の体系そのものであったの

だ。」と述べている。茉莉の創り出した美しい、退廃的な世界は、現代では「腐女子」といわれる、ある文化に通じている。「腐女子」とは、女性のための、男性同士の恋愛を描いた少女マンガを好む女性のことである。

上野千鶴子²⁵⁾によると、この「女子」というところがミソで、「『女性』には、ことばどおり、『性的な存在』としての標識があるが、『女子』はそれをきっぱりとはねのける。かといって、男の視線にねめまわされてきた『少女』のような無垢を装った媚態もない。」と述べている。そして、そうしたマンガを、「女子の・女子による・女子のための・少年愛もの」と呼んでいる。つまり、男性の視線を意識しない世界ということである。実際彼女たちは男性同性愛には興味もない。上野²⁵⁾は、異性の視線を意に介さないというのは、一種のナルシズムであり、それが他の女子文化と腐女子文化を分けているものであるという。茉莉の描く作品は、父一娘のナルシズムであるということも言える。

男性の同性愛に興味を持っているわけではないが、禁断の関係ということには興味があるのだろう。その意味では関係性には開かれていると言える。やや外から眺めているわけだが、香山⁴⁾は、好きなマンガとかかわるときに、〈私〉がどこに位置するかで、関係性が開かれているかがわかると述べている。物語やその中の登場人物を〈私〉との関係性でとらえることを嫌っている人、それに疲れてしまった人が、〈私〉を消し去っておたくになっているというのである。おたくの概念は難しいものであるが、関係性からみるというのは、臨床的な観点であると思う。腐女子文化は、女性の手前のある一時期、そこから性の世界をみるというものなのかもしれない。この世界のみならずずっといるというのは、問題となることが多いだろう。しかし腐女子と言われている多くが、ジェンダーアイデンティティに問題があるわけではなく、普通に結婚して子どももいて、なおかつBLも（ボーイズラブ）も好きという、健康的にこの文化にかかわっている人も結構いるようである。少女の世界だけれども、時々帰ることのできる、安全な「蜜の世界」だろうか。

このように、茉莉の創り出した世界は、現代の腐女子に通じるもので、その走りと言えるが、森茉莉が50歳を過ぎてから、また彼女の生きた時代にこれを小説にできたのは、驚くべきことである。どうしてここまで自由な発想を持てたのだろうか。（もっとも、社会的な非難を気にして、のちには少年愛ものを書くことを辞めたのだろうとも言われている¹¹⁾）。それを可能にしたのは、彼女

の少女性、あるいは子ども性を保っていける不思議な能力なのだろう。それは中心気質というものであり、またその気質を曲げずに育てることができた環境もあっただろうし、彼女が意識的か、無意識的かその程度はよくわからないが、少女を生きられる人であったこと、そして父との間の濃密な関係を書く作家であったからだと思われる。矢川澄子²⁶⁾は、森茉莉は、「解放された少女」を書いてくれたと言っている (p. 95)。また、茉莉の書いたそういう世界でしかのびのびした少女が描けないのは、悲しいことだとも述べている。

2) 絶対少女と『甘い蜜の部屋』

先に述べた、森茉莉が「絶対少女」¹⁵⁾であるというのは、言い得て妙であると思う。しかも、森嶋¹⁵⁾によると、少年愛のあとに描かれた『甘い蜜の部屋』を描き切ることで、もはや父の庇護を必要としないという意味で、「絶対」なのだそう。「蜜の記憶の現前化、再現のキャンパスという創造を通して、作者、森茉莉はもはや父の掌を超えたのだ。父の掌やまなざし、微笑をもはや必要としなくなるまで」と述べ (p. 131)、だから死ぬまで少女でいられたのだという。

また森嶋¹⁵⁾は、森茉莉は父の愛という恩寵で絶対少女に達したのではなく、『甘い蜜の部屋』を創造することで、鷗外を超えた、「記憶をちりばめて織りなされた幻想の父」(p. 131)を創造できたからであるという。少年愛小説は、『恋人たちの森』・『日曜に僕はいかない』(1961)・『枯葉の寝床』(1962)の順で書かれているが、順を追うごとに、少年より、年上の男性が嫉妬に苦しむ様子が描かれるようになっていく。行きつく先は、少年を殺し、自分も自殺するという暗い最後である。次第に茉莉は、少年より、年上の男性に寄り添って描いているように思える。村田¹¹⁾は、サド=マゾヒズムを描くことで、「父」の位置に立つことができたのではないかと述べている。矢川²⁶⁾も、森茉莉との対談で、「(鷗外の作品は)綺麗さには凄くまいてるけど、悪魔がないのが、好きじゃないの」という茉莉に対して、「だから茉莉さんの方が上かもって言ってるのよ。そこがやっぱり、魔をもった林作(『甘い蜜の部屋』の主人公のモイラの父親)と茉莉さんのお父様との違いでもあるわけでしょう。」と述べている。悪魔を描きたいというようなことは、茉莉もいろいろなところで言っている。茉莉は、『甘い蜜の部屋』で、父との濃密な疑似恋愛のような関係を描きながら、父を超える、あるいは父から自立するということをしたようである。

6. おわりに

ペロウの昔話でグリム童話の初版にも収録された『青髭』という恐ろしい物語がある。青髭と呼ばれる城の主に、連れ去られた女主人公はそこで前妻たちが処刑された恐ろしい部屋を発見し、自分もその一人となりそうなところを、知恵を絞り、兄たちが助けに来て、無事父の家に帰るといふ物語である。茉莉が『甘い蜜の部屋』を書いたのも、これと同じ、父の家に帰るといふことだろうか。これまでみてきたようにそれは違うだろう。そこに書くという行為があるのは、ただもとに帰る以上のものがある。珠樹の家を出てきたときはそうだったかもしれないが、生活のために書くというのは、自立した人間として父と並ぶ、ということである。

気ままに生きているように見えるが、「本音居士」とお墓に彫ってほしいというあたり、本音を生きることが自分と言っているようである。絶対少女らしい発言だが、鷗外の印税なきあととは自分で書いて生きていたわけで、こころの中の父に守られていたとはいえ、自分の本当に大事なものを守る強さは持っていたのではないだろうか。「もし一生が二つあるのなら、…」は子どものセリフではないだろう。森嶋¹⁵⁾は、「現在、森茉莉が目ざされるとすれば、社会的、文化的な女性性にとまどい、どこか拒否感をもちながら女性であり続けなければならないジレンマから、絶対少女に憧れる女性の心理を力づける故ではないかと、連想が広がってゆきそうだ」(p. 132)と述べている。筆者も、森茉莉について描きながら、だんだん森茉莉かぶれになってきたように思う。とはいえ、いつまでもかぶれているだけでもいられないだろう。自分のオリジナル「絶対少女」の創造が必要である。

引用文献

- 1) 早川茉莉2007「森茉莉年譜」ユリイカ12月 特集・森茉莉、青土社
- 2) 石毛奈緒子2001年12月「森茉莉の病跡」日本病跡学雑誌第62号
- 3) 片口安史1967『新版作家の診断』新曜社
- 4) 香山リカ2007「腐女子の自我は煙と消えた」ユリイカ『腐女子マンガ大系』青土社
- 5) 河合隼雄1985「リンドグレーン『長くつ下のピッピ』『ピッピ船に乗る』『ピッピ南の島へ』『子どもの本を読む』光村図書
- 6) 小島千加子1992「人と作品」森茉莉著『贅沢貧乏』講談社学芸文庫、講談社

- 7) 小島千加子2013「編集者から見た不思議な作家の素顔」
文芸別冊総集編, 森茉莉・天使の贅沢貧乏, 増補新版,
河出書房新社
- 8) 小坂和子1990「永遠の少女」『現代青年心理学』培風館
- 9) Leonard, L. S. 1982. The Wounded Woman. 藤瀬恭子訳
1987『娘の心が傷つくとき』人文書院
- 10) 三島由紀夫1993「あなたの楽園, あなたの銀の匙—森茉莉様」森茉莉全集4, 月報2
- 11) 村田智子2012「作家・森茉莉における少年愛の幻想と「父」」日本病跡学雑誌第83号
- 12) 森杏奴1981『晩年の父』岩波文庫
- 13) 森鷗外1996『妻への手紙』ちくま文庫
- 14) 森於菟1993『父親としての森鷗外』
- 15) 森島章人2007「「あわれ」から飛びだした金魚」ユリイカ No. 544, Vol. 39-15 特集森茉莉
- 16) 森茉莉1992『記憶の絵』ちくま文庫
- 17) 森茉莉1992『贅沢貧乏』講談社文芸文庫
- 18) 森茉莉1993「記憶の書物」森茉莉全集I 『靴の音』筑摩書房
- 19) 森茉莉1993「息子ジャックと私」森茉莉全集I 『1950-1960年代のエッセイ』筑摩書房
- 20) 森茉莉1993「私の離婚とその後の日々—今日出海氏へ」森茉莉全集I, 筑摩書房
- 21) 森茉莉1993『マリアの気まぐれ書き』森茉莉全集V, 筑摩書房
- 22) 森茉莉1994『ベスト・オブ・ドッキリチャンネル』ちくま文庫
- 23) 森類1995『鷗外の子供たち』ちくま文庫
- 24) 中島梓2013「森茉莉との出会い」文芸別冊 総特集森茉莉・天使の贅沢貧乏 (増補新版) 河出書房新社
- 25) 上野千鶴子2007「腐女子とは誰か」ユリイカ『腐女子マンガ大系』青土社
- 26) 矢川澄子2006『父の娘たち』平凡社
- 27) 矢川澄子2013「父と娘の深い恋愛」文芸別冊 総特集森茉莉・天使の贅沢貧乏 (増補新版) 河出書房新社
- 28) 安永浩1980「〈中心気質〉という概念について」『てんかんの人間学』木村敏編, 東京大学出版会
- 29) やまだ・とおる1993「ほくから見た, 母 茉莉」, 森茉莉全集5, 月報1